
月下に吠えるケモノ

大迫力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下に吠えるケモノ

【Nコード】

N3603G

【作者名】

大迫力

【あらすじ】

新選組隊士・神楽祐平は、ある事件を境に己の生き方に疑問を覚えるようになる。事件をきっかけに出逢った女性、由衣と過ごす時間の中に嘯かな安らぎを感じる神楽だったが……。幕末の京都。組織の暗闘に翻弄された、とある男女の物語。

一 或る夜の迷い

満月である。しかし、月は雲に隠れて姿が見えない。暗い夜だった。

一昨年、御所の近辺で行われた長州と薩摩・会津勢との戦闘によって、京の街は焼け野原となった。

復興は進んでいるものの、未だいたるところに廃墟が残されている。

ここもそんな区域の一つだった。崩れかけた土壁と、家々の焼け跡が広がる。

昼間であつても人氣は無いであろうその狭い路地は、夜ともなれば不気味な雰囲気を漂わせる。

その路地を、一列になつて駆ける侍の一団があつた。

京都守護職預「新選組」の隊士達である。

総勢五名。

皆、浅黄色で袖に白い山形模様を染め抜いた羽織を着ている。

その下には鎖帷子を着込み、頭には筋金の入った鉢巻を巻いた者や、鎖頭巾を被った者、槍を担いだ者も一人いた。

路地をそろそろ抜けようかという所で、一同の脚は止まった。

通りの向こう側に、半壊しかかった町屋がある。傍目には廃屋に映るであろうその町屋に、一同の目は注がれていた。

「あそこだな、長州の犬共が潜んでおると言うのは。探索方の話では六、七人はいるということだったが……」

指揮官の鈴木三樹三郎はそう呟くと、隊士達の顔を見回す。鈴木が目が一人の隊士に止まった。

深く被った鉢金の陰から覗く目は細く鋭い。そして、顔の右半分を縦に大きく走る傷が、他者を寄せ付けけない雰囲気を漂わせている。

その隊士へ向かつて鈴木は言った。

「神楽、お前は先回りしてあの家の裏を固める」
神楽と呼ばれたその隊士は無言で頷く。

「後の者は私と共に正面から斬り込む、いいな！」
他の隊士達も無言で頷く。鈴木に「行け」と言われ、神楽はその場を駆け出すと脇道へ入って行った。

町屋へ踏み込むと、そこに潜伏していた二名の浪士が斬りかかってきた。

激しい乱闘となったが、一人は肩から袈裟懸けに斬られて即死。もう一人も隊士の槍で脇腹を一突きにされて倒れ、それ以上の抵抗はできなかつた。

「他の仲間はどうした？ 言え！」
鈴木に詰め寄せられた浪士は、息も絶え絶えになりながら、絞り出すように口を開く。

「知らん……知った所で、誰が……貴様等なんぞに、言うか……幕府の走狗め……！」

そう言つて力無く笑う浪士を、鈴木は怒りに任せて蹴り跳ばすと、そこへ隊士の一人が駆けつけて来た。

「鈴木さん、ありました。奥の部屋に抜け穴が！」

「……クソがあつ！」

鈴木は、さらに怒り狂つて浪士を蹴り付けた。

裏の路地では、神楽が息を殺して町屋を見詰めていた。

正面からの斬り込みで片が付けばそれでいい。

もし、浪士達がこちらに逃げ出て来ても、人一人がようやく通れる狭い路地である。確実に仕留めることができる立ち位置に自分はある。そう思った時、神楽の視界に路地へ這い出てくる人影が入った。

暗いために相手にはこちらが見えないのdarou。彼らは神楽へ向かつて駆けてくる。

だが彼らの脚はすぐに止まった。

暗がりの中に立つ人影が突然視界に入ったせいもあるが、空にかかっていた雲が切れ、満月が辺りを明るく照らし出したのだ。

これでお互いの姿がはっきりとした。浪士方は四人おり、神楽が敵であることに気付くと反射的に刀を抜いていた。

神楽も刀を抜いて彼らに突き付けたが、その瞬間、思いもしなかったものが視界に飛び込んできた。

刀を構える三人の浪士達の後ろに、一人の少女が立っていたのだ。歳は十五、六といったところであろうか。大きく澄んだ目で、真っ直ぐに神楽を見据えている。

一瞬、自分が戦いの場にいることを忘れた。

だが次の瞬間、「うおおおっ！」という掛け声と共に浪士達が斬りかかって来た。

我に帰った神楽は、すぐに先頭の浪士の刃を弾き返すと、姿勢を低くして胴払いをかける。

脇腹を斬られて倒れ込む浪士の横をすり抜け、神楽は瞬時に次の浪士の両腕を斬り落とした。

「あぁっ……」

刀を握ったまま地面に落ちた己の両腕見て、茫然と立ちすくむ二人目の浪士を押し倒し、神楽は三人目の浪士と対峙した。

後ろの少女は相変わらず神楽を見詰め続けている。

「壬生浪め、よくも同志を……」

三人目の浪士は刀を大きく上段に構える。

「長州脱藩、寺沢喜八……」

「……新選組、神楽祐平」

「参る！」

寺沢と神楽は激しく刃をぶつけ合う。両者の力は拮抗し鏝迫り合いに入った。少女は立ちすくんだまま、懐へ右手をやりながら、目と鼻の先で両者を見詰めている。

寺沢は少女の方を向くと「早く、逃げる！」と有らん限りの声を振り絞って叫ぶ。だが、それが彼の命取りとなった。

叫んだことで生じた隙について神楽は寺沢を突き放し、体勢を崩したところを斬り伏せたのだ。

断末魔を上げることもなく、寺沢は倒れ、瞬時に人から物へと変わった。

神楽は視線を少女へ移すと、そのまま突きの体勢をとって少女へ迫る。

だが切っ先が向けられるのと同時に、少女は懐から取り出したピストルを神楽へ突き付けていた。

少女は路地の板塀に背中を着けている。逃げることはできない。

「無駄だ。諦めろ」

神楽は動じること無く、冷静な口調で言った。

だが少女は、震えながら神楽を見詰め続ける。

殺したくない

なぜかそう思ってしまったその時「神楽！」と自分を呼ぶ声が聞こえ、神楽は体勢を崩すことなく視線を声のした方へ向けた。

路地の奥から、鈴木と数人の隊士が走って来るのが見える。

「その娘も一味だ、斬れーっ！」

鈴木の言葉で、神楽は少女へ視線を戻す。

少女の目に迷いの色が見えたように感じた。

「よせ、今ならまだ間に合う……」

だが少女は、神楽の言葉を拒絶するように、銃口を己のこめかみに押し当てる。

「なぜだ……？」

少女は答えること無く、引き金を引く。

あるいはそれが、問いかけへの答えだったのかもしれない。

銃声が響き、全てが終わった。

神楽にはもう何も聞こえなかった。

時が止まったかのようにさえ感じられた。

全身から力が抜け、膝をついて座り込む。

鈴木達が駆け寄ってきたことにも気付かず、神楽は動かなくなつた少女を見詰めて呟いた。

「なぜだ……？」

空を流れる雲が月を覆い隠し、辺りは再び闇に包まれようとしていた。

二 洛中にて

「なぜ斬らなかつた？」

土方歳三はもう一度問い質した。だが、神楽は黙りこくつたままである。

慶応二年九月。

この日、新選組の屯所である西本願寺の一室で、神楽の査問が行われていた。

「誠」の一字を染め抜いた隊旗を掲げた床の間を背に、真ん中へ局長の近藤勇、左側には参謀の伊東甲子太郎、右側に副長の土方が座っている。

そして三人と向かい合う形で、部屋の中央に神楽が座っていた。「黙っていちゃ分からんだろうが、なぜ斬るのをためらった？」

「
苛ついた様子の子の土方を見据え、神楽は口を開くと一言だけ、呟くように答えた。

「……わかりません」

既に覚悟を決めているかのようなその一言に、場の空気が凍り付く。

しばらく沈黙が続いた。

「自分が何を言っているのかは分かっているな……」

そう言つと土方は、神楽を睨み付ける。

結局の所、神楽は敵を前にして怯んだ。例え相手が少女だったとしても、敵であることに変わりはない。

新選組が相手にしていた過激派浪士達は、確固たる思想・信条と、強靭な意志力を以て行動している連中である。

幕府要人の暗殺といった凶行を繰り返しても、彼らは「勤王」「尊皇攘夷」という大義の下にそれを正当化してしまう。

もつとも、「勤王」「尊皇攘夷」は当時の日本人が共通して持っていた認識であり、幕府側の新選組もこの大義の下に戦っていた。とどのつまりは旧来の秩序を壊そうとする者達と、それを守るうとする者達の争いに帰結する。

そのため、秩序を守る側にある新選組にとって、それを乱す過激派浪士には頑とした態度を徹底させねばならなかった。

神楽の失態は当然、許されるものではない。

土方は神楽を見据える。

「お前の失態は土道に背いている。局中法度に照らし……」

「土方君、それは少し酷というものですよ」

土方の最後通告を遮ったのは伊東だった。

水戸出身で北辰一刀流の使い手。鈴木三樹三郎の実兄でもある。

「聞けば、彼は三人も斬っている。いくら怯んだとは言え、相手は小娘。ためらうのは人としての情があれば当たり前です」

やんわりとした言い方である。

「情無きは、野に生きる獣と同じ。されど我らは獣にあらず、人です。それに、今度の責は隊を指揮していた三樹三郎にもある。弟の落ち度は兄である私の落ち度。彼に腹を切らせるならば、我らも……」

伊東はにこやかな表情を崩すことなく、土方を見る。

筋が通っている上に、痛いところを突いていた。土方の眉間にしわが寄る。

伊東は才子を絵に描いたような男であった。

頭が切れ、弁舌も達者。近藤の信頼厚く、隊士達からの人望も高い。

だが土方とは反りが合わず、意見が対立することも多かった。

「近藤さん……」

面倒臭そうに、土方は近藤を見やる。

眼を閉じて黙っている。自分の考えに反対するときはいつもこう

いう態度をとる。

長年の経験でそれを知っている土方は、釈然としない様子で一呼吸置くと、神楽を睨んだ。

「神楽祐平、別命あるまで、隊務につくことを禁ずる。しばらくは大人しくしている」

ぶつきらばうにそう言うと、土方は席を立って部屋を出て行った。伊東はその涼しげな表情を崩すことなく神楽を見つめる。

近藤は気まずそうに黙りこくる。

「……有難き、仕合わせ」

それだけを言うと、神楽はゆっくりと頭を下げた。

「なぜ斬らなかつたんだ？」

見廻組隊士・倉島克己が冗談半分に放った、土方と全く同じ問いかけに神楽は困惑してしまった。

査問から三日後、賀茂川を見下ろす茶店に、神楽と倉島はいた。

「すまん、苦勞をかけた。周りの目も色々あつたらうに……」

「気にするな。友からのたつての頼みなんだ。それに、隊内で厄介者扱いされるのには慣れてる」

自嘲気味に笑う倉島に、神楽も思わず苦笑してしまう。

二人は浪人の頃からの朋輩であり、同じ時期に京へ来て意気投合した仲だった。

その後、同じ幕府の治安組織である新選組と見廻組へ別れて入隊した二人だったが、未だに付き合いは続いている。

ただ、やはり組織の気風の違いであろうか。総髪を無造作に結つて後ろに垂らした、いかにも浪人風な神楽の鬘に対し、倉島の鬘は丁寧に結われ、月代も綺麗に剃られている。

更に、倉島は着物の上に黒い定紋付きの羽織を着ていたため、傍目には浪人とどこぞの藩士のようにだった。

「……その娘、長州系の浪人達の連絡係で、都中に散らばっている不逞浪士達の文を取り次いでいたようだ」

神楽が、見廻組の探索方に所属する倉島にした頼み事。

それは自身が自決させてしまった少女の身元確認だった。

もちろん新選組の隊内にも、探索方は存在する。それも見廻組とは比較にならない程の情報収集能力を持っている。当然のごとく、少女に関する詳しい情報は揃っているはずだ。

だが末端にいる平隊士の神楽にそれが知らされるはずもなく、それを求められる立場でも無いことは自覚していた。

ゆえに倉島を頼ったのである。

「卑劣な連中だ。年端のいかない小娘まで利用する……それで自分達を勤皇の志士だとかぬかしてやがるんだから笑わせる」

憤る倉島を横目に、神楽は俯いて黙り込んだ。

「なあ、祐平……」と、倉島は急に声を押し殺した様子で語りかけてきた。

「お前、やっぱり行くのか？」

神楽は相変わらず黙り込んだままだ。

「止めておけ。行けば迷いが生じるぞ。情に流されちゃ、こんな商売できやしない」

「わかつている。だが……」

神楽は倉島を見つめた。

「これ以上言わせるな」とでも言いたげな表情から全てを察し、倉島は溜め息をつく。

「ならもう言わん。その娘の墓は、四条の明光寺にあるよ」

その言葉を聞いた神楽は立ち上がると、床几の上に銭を置き、倉島へ一礼してその場を後にしたのだった。

半刻程かけて明光寺に辿り着き、神楽は寺の坊主から教えられた墓の場所へ向かっていた。

墓地は林の中にあった。茂った木々によって日の光は遮られ、辺りは薄暗く、地面は湿っている。

季節のせいもあり、やや肌寒い感じさえした。

神楽は辺りを見回す。すると、視線の先にまだ新しい盛り土があった。

あそこが墓に間違い無い。そう思った時、神楽の足が止まった。そこに先客がいたためだ。

先客は若い女だった。そしてその女と目が合った瞬間、神楽はあの夜と同じ感覚に襲われた。

自決した少女に、よく似ている。自分を見つめる大きく澄んだ瞳に、神楽は思わず息を飲んだ。

歳は二十二、三位。恐らく神楽とそう違わない。大人びた顔つきで、落ち着いているがどこか哀しげな雰囲気を漂わせている。

それが一種の色気のようにも感じられ、戸惑った神楽はしばし言葉を忘れた。

「あの……」

ようやく言葉を発したその時、女はそっぽを向くように視線を反らしす。

「帰つとくれやす！」

胸に突き刺さるような一言だった。

「この子はもう、あんさんらの仲間やおへん。これ以上苦しませんといて下さい！」

「いや……拙者は……」

二人の間に静寂が訪れる。遠くで石畳を掃く、寺男のホウキの音だけが淡々と響いていた。

女は、名を由衣と言い、自決した少女の実の姉であった。

つらつらと話しているうちに、二人は三条大橋の上に出ていた。

「なぜ俺を責めない？」

神楽は意を決したように由衣へ訊く。

だが由衣は優しげな表情を崩すことなく、達観したかのように

微笑むだけだった。

「お互いにそういう立場やったのなら、あんさんは何も悪うおへん」

返す言葉が無かった。

「二人っきりの姉妹やった。うちら、わりと仲も良かったんですえ。けどあの子は、人一倍真つ直ぐで、その癖強情で、言うこと聞かへんところもあって……国を思う気持ちに男も女もない、そない言うて、どんどん自分の道を行ってしもつて……こうなる事は、あの子自身が一番ようわかつとったと思います」

「……………」

仕方がなかった。

そう思う事で、由衣は全てを納得しようとしている。毅然と振る舞おうとしているが、否が応でもそれは伝わってくる。

再び沈黙が訪れ、神楽は気まずそうに河原へ目をやった。真新しい制札が立てられている。

ここ一カ月程の間に、三条河原に立てられた制札が何者かに引きずり倒され、破壊される事件が頻発していた。

そのことを思い出しながら河原を眺めていると、不意に由衣の歓声が上がった。

「赤とんぼ！」

由衣の指差す先に、二匹の赤とんぼ空中に弧を描いて飛んでいる。

由衣の無邪気な笑顔に、神楽の硬直していた表情も思わず綻んだ。

季節の移り変わりなど、何年も意識することがなかった。しかし由衣の何気ない一言で、それを感じた。

時が経つのも忘れ、二人はしばし、雲一つ無い初秋の空を眺め続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3603g/>

月下に吠えるケモノ

2010年10月9日20時50分発行